

学校評価

教育理念・使命・目標

＜建学の精神＞

聖書に示された世界観・教育観・子ども観をもって、キリスト教主義による教育・保育を実践している。子ども一人ひとり、神に愛されている存在として、慈しみ育てることを使命としている。子どもを中心に据えた教育・保育は、一貫した流れの中で受け継がれている。

＜教育方針＞

- 子ども一人ひとりが、イエス・キリストによって示された神の愛に気づき、自らがかけがえのない存在であることを知り、喜びと感謝をもって過ごす。
- お互いの個性や多様性を認め合い、自主性、創造性を発揮して共に育ちあう。
- 神の創造された自然の中で心と体を存分に使って遊び、健康的な心身を育み、豊かな感性を培う。これらの教育方針に基づいて、教員は神、イエス・キリストとの交わりによって支えられ、意図的、継続的、反省的な努力、配慮をもって子どもと共に学び、成長する存在でありたいと願って保育を行っている。また、遊びを中心とした保育を実践し、子どもの心の育ちを支え導く援助を心掛けている。

2025 年度の評価項目

- キリスト教主義教育→ 本園の教育の根幹となるため毎年の評価項目に選定。
- 教育・保育課程、指導→ 重要項目であり、経年変化を図るため毎年の評価項目に選定。
- 教育・保育環境整備→ 園児が遊びを通して学ぶ空間としての環境は重要であるため毎年の評価項目に選定。
- 保護者との連携→ 園児の健やかな育ちのためには保護者との連携は不可欠であるため毎年の評価項目に選定。
- 保健衛生・安全対策→園児の安全対策をとりつつ行う教育の充実のため、評価項目に選定。

2025 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義教育の理念の共有、キリスト教主義教育の根幹である愛情を感じられる教育の実践】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○教員間でキリスト教主義教育の理念共有に努める ○園児一人ひとりの発達・個性を把握し、園児が愛されていると感じられる保育をする ○園児一人ひとりが自分と他者との違いを知り、理解し合い、「共に生きる」ことを学べる保育をする 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各クラスで礼拝を行い、身近な自然や自然現象を題材に、神からの恵みや守りに気づき、共に考え、喜びと感謝をもつ時間を大切にしたい。また、欠席の友達をはじめ、家族や他者を思って祈るひとときを持つよう努めた。 ・その日の礼拝の内容や、幼稚園で大切にしたいこと、園児と共に考え話し合ったことが保護者にも伝わるように、降園時の伝達や配布物、連絡アプリを活用し、理解が深まるよう工夫した。 ・園児一人ひとりの誕生日を把握し、教員がお祝いの言葉をかけることで、園児が愛されていることを実感し、喜びをもつ時間となるようにした。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・年長組は西宮聖和キャンパス内のダットレーチャペルで学年礼拝を行った。年中、年少組は、各クラスでさんびかを歌い、聖書の話聞く礼拝を行った（年間実施回数：年長組 33 回、年中組 30 回、年少組 25 回）。 ・6 月には、各家庭より花を持ち寄って花の日礼拝を行った。年長組はホールで、年中組・年少組は西宮聖和キャンパス内のメアリーイザベラランバスチャペルで、園児・保護者・教員と共に礼拝を守った。また、11 月の収穫感謝礼拝では、各家庭より果物を持ち寄り、神からの豊かな恵みに感謝して祈ることができた。持ち寄った花や果物は、関西学院の教職員や日頃からお世話になっている方々に届け、恵みや喜びを共有する機会となった。 ・11 月には関西学院宗教総主事・打樋啓史先生を講師に迎え、クリスマス準備保護者会を開催した。1 月には、関西学院初等部部长・福万広信先生を講師に、小学校教育に関する講演会を行った。 ・クリスマスには、年長組がクラスごとにページェント（聖劇）による礼拝を行い、年中・年少組、保護者、来賓と共にイエス・キリストのご降誕を祝い、喜び、祈りの時をもった。 ・1 月には阪神淡路大震災から 31 年を覚えて礼拝を行い、年長組はホールで、年中・年少組は各クラスで礼拝を守り、防災・減災への意識を高める機会とした。 ・キリスト教保育連盟の刊行物「ともに育つ」を保護者に配布し、キリスト教主義教育の理解が深まるようにした。 ・教員の学びを支えるため、キリスト教保育連盟刊行物「キリスト教保育」を年間を通して全教員に配布し、キリスト教主義教育の理解を深めた。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート問 2「幼稚園は、子どもたち一人ひとりを受け止めて保育をしている」では、「強くそう思う」が 80.7%（前年比 3.3%増）となった。また、問 3「友だち同士が認め合い、力を合わせる楽しさ・喜びを味わうまでの『プロセス』を大切に保育している」では、「強くそう思う」が 76.0%（前年比 0.7%増）であった。園児一人ひとりに寄り添い、集団生活の中で育ちのプロセスを大切にしている幼稚園の姿勢が、概ね理解・共感されていることがうかがえる。 ・教員アンケート問 1「教員は、キリスト教主義教育の理念を共有している」では、「強くそう思う」が 81.3%（前年比 24.2%増）となった。また、問 2「園児一人ひとりの発達・個性を把握し、愛情を注いで保育している」では、「強くそう思う」が 75.0%（前年比 17.9%増）となった。教員が園児一人ひとりに愛情をもって関わり、発達や個性、集団の中での育ちを支える援助内容について、共有・共通理解が深まってきたことが示されている。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員全員が日頃から園児の姿や保育の様子を丁寧に見つめ、一人ひとりの発達や個性、また集団の中での育ちに応じた援助内容について共有し、共通理解を深める。そのうえで、園児の育ちを中心に据えた保育のあり方を考えていく。 ・園児への援助についての省察を、各クラス・学年・全体で共有し、教職員同士がキリスト教主義教育に関する共通理解を対話を通して深められるようにする。時間的に共有が難しい場合は、教職員連絡アプリを活用し、共通理解を図る。また、教師会や園内研修において理念を共有する場を設ける。

評価項目 【テーマ】	教育・保育課程、指導 【各領域に主体的に取り組む姿勢を培う援助】	自己評価	A
目標	○園児が自律的な精神を養い、何事においても意欲的に取り組めるように援助する ○園児が集団の中で、互いに違いに気づき、理解し合えるように援助する		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的な計画に基づき、指導計画（長期・短期）、食育計画、保健計画、安全計画、保育経過記録、指導要録を作成し、園児一人ひとりの発達段階や育ちを考察・省察しながら教育・保育を行った。 ・園児の育ちが個から集団へとつながっていくことを願い、園児の発達に応じた援助を行うとともに、クラス全体での活動に意欲的に取り組めるようにした。 ・登園時・降園時や懇談会などの機会を通して、園での取組やねらい、活動内容、思いや願いを保護者に伝えた。iPadで撮影した動画や写真を活用することで、より具体的に理解してもらうことができ、園児が集団生活の中で育む力や成長、変化を共有する機会となった。 ・日々、園児一人ひとりの姿や育ちについて教員間で意識的に話し合い、成長が積み上がっていくよう努めた。また、各学年の活動について、ねらいや発達、経験などを省察し、教員会議で共有・連携した。年度末には、個々の育ちや願いを引き継ぎ、共有した。 ・各教員が「保育士等キャリアアップ研修」（幼児教育・障害児保育・食育アレルギー対応・保健衛生安全対策・保護者支援子育て支援・マネジメント・保育実践等）を受講した。教員自身が各分野の研修を受講することで視野が広がり、教育・保育の充実につながった。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの問5「幼稚園は、子どもたちの育ちに応じた保育プログラムを実践し、個人に添った援助を行っている」に対して、「強くそう思う」が65.5%（前年比0.4%増）となった。また、問6「幼稚園は、『子どもたちが集団の中で仲間と共に過ごす喜びを感じながら、社会性・協調性を育む援助』を行っている」に対しては、「強くそう思う」が74.3%（前年比3.8%増）であった。 <p>いずれの項目も肯定的な回答が得られた背景には、教員同士が保育内容について協議し、園児の育ちを個と集団の両面から捉え、発達や園児の状況について共有する機会を設けていることが、評価につながったと考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケートでは、問4「幼稚園は、園児一人ひとりの興味・関心を高め、主体的・意欲的に活動できるように保育をしている」に対して、「強くそう思う」が93.8%（前年比22.4%増）となった。また、問5「幼稚園は、園児の育ちに応じた保育プログラムを実施し、個人に沿った援助を行っている」では、「強くそう思う」が75.0%（前年比32.1%増）となり、こちらも高い評価が得られた。 ・一方、教員アンケートの問9「幼稚園は、教員の教育・研究のための環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている」では、「強くそう思う」が43.8%（前年比0.9%増）にとどまった。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き、保護者へ教育・保育の内容や子どもの様子を伝える際にはiPadを活用し、より理解が深まるよう工夫していく。 ・教員の勤務形態により話し合いが難しい場合もあるため、より多くの教員が意見交換できる環境を整えるとともに、教職員連絡アプリを活用して情報共有を円滑にする。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園化に伴い、必要となる研修内容も変化するため、研修方針を策定し、研修の充実を図ることで教育・保育の質の向上につなげる。
--	---

評価項目 【テーマ】	教育・保育環境整備 【設備整備、遊具・教材の充実、教員の教育・研究環境の整備】	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○法人と連携し、設備整備の安全、維持管理、充実のための点検・整備・拡充を行う ○法人と連携し、園児の育ちに適した遊具・教材の充実を図る ○教員の教育・研究活動を支える環境の充実を進める 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼保連携型認定こども園へ移行したことに伴い、給食室を設置し、9月から自園給食を開始した。また、各保育室およびホールの天井・壁の改修工事を行った。 ・園児の活動を充実させるため、ラベンダー、ミント、ローズマリー、レモンバームなどのハーブを栽培した。また、保育室やデッキにはベゴニア、シュウメイギク、シクラメン、ポインセチアなど季節の花々を飾り、季節を感じられる環境を整えた。 ・園児が園庭の花・果実・葉などをすりおろしたり、つぶしたり、ちぎったりして、五感を使った遊びに活用した。保育室や園庭では、チューリップ、ヒマワリ、インゲン、ナス、ピーマン、ヒヤシンス、クロッカス、カブ、ダイコン、ラディッシュなどの植物を栽培した。 ・自然豊かな園庭環境を維持するため、水やり、追肥、草抜き、間引きを行うとともに、教育的配慮を持ちながら植物の生育や安全面を考慮し、樹木の剪定・伐採等を実施した。 ・各保育室ではアカハライモリ、メダカ、金魚、ヌマエビ、ドジョウ、ザリガニ、カブトムシなどの生き物を飼育し、園児が身近に命を感じられるようにした。 ・ホール、職員室、保育室、デッキのワックスがけを年1回実施した。 ・嫌気性細菌の増殖を防ぐため、教員が砂場（2か所）および腐葉土の掘り起こしを週1回行った。 ・保育開始前には毎朝、園庭・遊具の安全確認を行った。また、随時施設部や聖和キャンパス事務室と連携し、修繕を行いながら環境の保全に努めた。 ・保護者会からの贈答品として、クリスマスにはクリスマスツリーを、卒園記念品としてクーゲルバーンの遊具をいただいた。 ・絵本（『こどものとも』『かがくのとも』『宇宙の迷路』など約80冊）を購入した。また、預かり保育クラスには新しい遊具（LaQ、迷路など）を導入した。 ・芋ほりを行うため、園庭のハーブを植え替えてサツマイモ畑を作った。土壌の酸度を計測し、畝を作り、紅はるか・安納芋を栽培した。苗植えから収穫、焼き芋として味わうまでの過程を教育活動として園児が体験し、収穫への感謝や喜びを分かち合う機会となった。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの問7「幼稚園は、補修・修繕等を含めた教育環境設備の点検、整備を適切に行っている」については、「強くそう思う」が59.6%（前年比0.7%増）となった。園庭・デッキ・保育室・遊具の安全確認や、教育環境設備の点検・整備を適切に行っている点が評価されたと考えられる。一方で、「そ 		

	<p>う思わない」との回答が 1.2%あったことも踏まえ、今後の改善に活かしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの問 8「幼稚園は、子どもの興味や関心、育ちに応じて遊具・教材を整えている」については、「強くそう思う」が 70.8%（前年比 3.9%減）、「どちらかといえばそう思う」が 26.9%（前年比 2.9%増）となり、概ね満足されている結果となった。iPad を活用して園児の活動の様子を写真や動画で発信したことにより、保護者が日頃の教育・保育環境を目にする機会が増え、幼稚園の教育・保育環境への理解や共感につながったと推察される。 ・教員アンケートの問 9「幼稚園は、教員の教育・研究のための環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている」については、「強くそう思う」が 43.8%（前年比 0.9%増）、「どちらかといえばそう思う」が 50.0%（前年比増減なし）という結果であった。認定こども園への移行に伴い様々な変化が生じ、教員が学びの時間を十分に確保しづらかった状況も影響していると考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・教員による日々の設備整備の点検を継続して行い、補修が必要な場合には、教員が対応可能な範囲で速やかに対処する。対応が難しい場合には、施設部へ報告・連絡し、修繕等を迅速に実施する。また、必要に応じて保護者へ説明し、情報共有を図る。 ・園児に適した遊具や教材については、担任・学年・全教職員で協議しながら検討を進める。併せて、その意図やねらいを教職員全体で共有する。 ・幼保連携型認定こども園への移行に伴い、園児の保育時間が長くなったことで、教員が研修・研究会・学会等に参加する余裕が十分に確保できていなかった。今後は、認定こども園として必要とされる研修を重点的に位置づけ、教員が学びの機会を確保できる体制を整えることが求められる。

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【保護者との連携の強化】（重点）	自己評価	B
目標	○園の教育方針について理解を深め、園児の心身の健全な発達を願い、家庭との連携を図る		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取り組みの状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日、園児を送迎する保護者と対面でコミュニケーションを図った。園児の体調、遊びや生活の様子、仲間関係など、日々の小さな変化を捉えて伝えるとともに、家庭での様子を聞き、共通理解をもって子どもの育ちを見守るよう努めた。 ・降園時には、教員が保護者全体に向けて一日の活動や園児の姿、育ちや願いなどを伝え、園生活への理解につなげた。 ・各クラスで iPad を用いて保育中の様子を写真や動画で共有した。 ・連絡アプリを活用し、欠席・遅刻・早退の連絡や担任からの連絡事項を送信することで、家庭との連携を強化した。 ・クラス懇談会、保育参観日、個人懇談会等を実施した。 ・毎週木曜日に絵本貸出を行い、親子読書ノートに家庭での読み聞かせの様子や親子のやりとりを記入していただいた。これにより、園と家庭の双方で子どもの姿を共有し、相互理解と援助につなげた。 ・今年度は以下の保護者参加行事を実施した。 <ul style="list-style-type: none"> 1 学期：進級式・入園式、保育参観日、花の日礼拝、夏まつり 2 学期：運動会、保育参観日、クリスマス礼拝・祝会 3 学期：保育参観日、ミュージックフェスティバル、卒園式・3 学期終了式 		

	<p>これらの行事に際しては、おたよりを配布し、行事の由来や子どもにとっての意味を事前に伝えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者会総会を行い、園長が保護者会活動について説明し、園生活の充実に向けて共通理解を図った。 ・保護者会のサークル活動では、楽しく充実した活動を通して保護者同士の親睦が深まり、リフレッシュする機会となり、心身の健康を支えた。 通年サークル：図書、からだを動かす、手芸、木のパズル、コーラス・音楽 1日サークル：心肺蘇生法講習会、入園準備手芸サークル ・保護者会役員が西宮市私立幼稚園連合会「保護者のつどい」に参加した。 演題「教育のうち最も重要な幼児期の教育について～一生を左右する幼児期に大切なこと～」 講師：西宮市教育長 藤岡謙一氏 ・保護者会役員会（月1回）は、役員と副園長、主幹保育教諭によって行われ、保護者会活動に関する協議（毎回議題あり）を行った。会費の運営（クリスマス祝会、園へのクリスマスプレゼント、卒園式・終了式、卒園記念品、講演会など）の内容選定も行った。 ・副園長・臨床発達心理士による子育て相談を実施し、保護者の悩みを聞き、より良い方向に向かうよう支援した。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの問9「幼稚園は、日頃から子どもたちの様子を保護者に伝え、また、保護者からの話を聞き、共に子どもの育ちを支えている」では、「あまりそう思わない」が3.5%（前年比0.8%増）、「そう思わない」が1.8%（前年比1.8%増）であった。 一方、教員アンケートの問10では、「強くそう思う」が81.3%（前年比2.7%増）と高い結果が得られた。 ・教員は、日常的に保護者と直接話す機会を積極的に設け、保護者の声を受け止める姿勢を意識している。しかし、保護者側の評価としては十分とは言えない結果となり、園としてさらなるコミュニケーションの質向上が求められることが示された。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼保連携型認定こども園に移行し、多様な家庭環境に配慮する必要がある。保育時間の長短にかかわらず、どの保護者にも安心して頂けるように、引き続き直接的な話とiPadによる園生活の情報発信を行う。 ・保護者と対面で話す際は、保護者の立場に立って理解に努め、共に考え合う姿勢をもつ。 ・保護者参加行事や保護者会活動を、より良い形に充実を図り、検討する。

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>保健衛生・安全対策 【日常の健康管理、疾病予防の取組、園医との連携による健康管理】</p>	<p>自己評価</p>	<p>B</p>
<p>目標</p>	<p>○- 園児一人ひとりの健康状態を的確に把握し、疾病の予防に努める ○教員では対応が難しい怪我や疾病については、園医に相談し、最善の対応を図る</p>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園児の健康状態（アレルギー、既往歴、痙攣、発達障害、肢体不自由など）について教員間で情報共有を行い、必要に応じて園医や心理士と連携した。 ・食物アレルギーのある園児については、原材料表やメニュー表を配布・掲示し、給食・おやつ準備時には複数の教員で確認する体制を整え、誤食防止に努め 		

	<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園児の体調変化に日常的に注意を払い、必要に応じて検温を実施し、保護者への連絡や保健館との連携を図った。 ・認定こども園化に伴い、内科健診（5歳児健診を含む）を年2回、歯科・眼科（視力）・耳鼻科（聴力）健診を年1回実施し、身体測定は毎月行った。 ・園医による「ほけんだより」を配布し、疾病予防や健康管理への意識向上を図った。 ・毎朝、園庭・園舎周辺の安全点検を行い、遊具の不具合があれば使用中止や修繕・撤去を行うなど、安全確保に努めた。 ・登園時には教員が健康観察を行い、園児の心身の状態を把握し、保護者と情報共有した。 ・月1回の避難訓練（火災・地震・津波・不審者・暴風雨など）を実施し、家庭での防災意識向上にもつなげた。 ・疾病予防として、手洗い・うがいの習慣化を支援し、食事前の机の消毒や保育室の換気を適宜行った。 ・夏季には暑さ指数（WBGT）を毎日確認し、屋外活動の制限や日陰でのプール遊びなど、熱中症対策を徹底した。また、プール監視員を配置し安全に配慮した。 ・不審者対策として、保護者に吊り下げ名札を配布し、送迎時の提示を徹底した。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの問12「幼稚園は子どもたちの健康管理、疾病予防に努めている（園医と連携の上）」では「強くそう思う」が55.0%（前年比5.3%減）、「どちらかといえばそう思う」が40.9%（前年比3.9%増）となった。保育中の園児の怪我や体調不良については教員個人で判断するのではなく、園医や保健館の指示を仰ぎ対応に努めた。このような幼稚園での取組みが概ね肯定的な回答につながっていると考える。 ・教員アンケートの問12「幼稚園は、園児一人ひとりの表情や様子等から体調変化に気づき、把握に努めている」の項目で「強くそう思う」が87.5%（前年比16.1%増）と大幅に増加した。これは、教員が日常的に園児の心身の変化に注意を払い、健康観察を丁寧に行っていることの表れであり、園全体として健康管理への意識が高まっていることがうかがえる。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も園医や保健館と連携し、園児の健康状態の把握に努める。また、教員同士で園児一人ひとりの体調の変化に気付けるよう、丁寧に目を配る。保育中の怪我や体調不良については健康経過観察表を用いて記録し、帰宅後の様子も保護者から聞き取り、症状が回復するまで経過を把握する。 ・幼保連携型認定こども園へ移行したことにより、教員の勤務体制が変化している。園児の様子や健康状態などの引き継ぎについては、情報共有を徹底する。 ・食物アレルギーによる事故を防ぐため、アレルギー別給食献立表の掲示や、提供時の複数名による声出し確認を継続して行う。 ・午睡中は、顔色や体調を確認し、午睡チェック表に記入する。 ・教員間の情報共有はもちろん、保護者との確認や意見も取り入れながら、園児の安全につながる迅速な対応を心掛ける。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

幼稚園から幼保連携型認定こども園へと移行した初年度は、園全体にとって大きな変化の連続であった。教員は、そのような状況の中でも、園児や保護者が安心して日々を過ごせるよう、手探りながらも互いに協力し合い、保育の充実に努めてきた。保護者から寄せられたさまざまなご意見を受け止めながら、園児にとって最も望ましい園の姿を模索した一年であったといえる。

保護者アンケートでは、全ての項目において概ね肯定的な結果が得られた。これは、制度や環境が変化する中であっても、教員の日々の変わらぬ関わりや姿勢が、「一人ひとりの園児が愛されていると感じられるキリスト教主義教育・保育」への理解につながっているためだと考えられる。

教員アンケートにおいても、概ね肯定的な回答が得られた。教員それぞれの経験年数や役割は異なるものの、「子どもを中心に据えた保育を行いたい」との思いは共通している。今後も、子どもの姿を丁寧を受け止めながら、対話を重ね、より良い教育・保育の実践を目指していきたい。

2025年度の評価をふまえて2026年度に予定している評価項目、テーマ等

- キリスト教主義教育
- 教育・保育課程、指導
- 教育・保育環境整備
- 保護者との連携（重点）
- 保健衛生・安全対策

第三者評価／学校関係者評価

全体として、誠実な「自己点検・評価」が行われていることを確認しました。キリスト教主義教育の理念が教員全体で意識的に共有され、それに基づき、子ども一人ひとりを大切にしながら日々の保育が丁寧展開されていることが読み取れます。特に、園児の集団生活の中での育ちのプロセスを大切にしている点は、大変重要な観点であり、優れていると評価できます。保育中に子どもが何に興味を持ち、何を探索し、どのような体験をしたのか、また他者とどのようにつながり、目を輝かせていたのかといった、保育の時間でしか把握できない姿を、iPad等も活用しながら他の教員や保護者と共有し、子どもを見守り、援助できている点は大変評価できます。保育の時間に直接携わらない保護者にとっては、結果的なスキルや成果を期待しがちであるため、今後も引き続き、活動の様子や育ちのプロセスを、ICTやドキュメンテーションなどの手法を活用しながら共有し、子どもの育ちを共に見守るシステムを構築していくことが望まれます。

保護者との連携についてのアンケート結果では、「教員側は十分に取り組んでいると感じている一方で、保護者の一部にはその実感が伴っていない」という認識のギャップが浮かび上がっています。これについては、情報の伝え方の課題と、受け取り側の捉え方の違いの双方が要因として考えられます。「今後の方策」に記されているように、幼保連携型認定こども園への移行に伴い、多様な家庭環境を背景とする保護者のニーズに十分対応しきれない可能性も示唆されます。保護者によって「知りたいこと」「話したいこと」の内容や水準は異なるため、これまで以上に双方向の対話の機会を意識的に増やすなどの工夫が求められます。

その他、自己評価に記載されている内容は概ね実態と合致していると考えられ、各項目に示された課題についても「今後の方策」において考察がなされていることから、それらが着実に実現されることを期待します。

今年度は幼保連携型認定こども園への移行という大きな転換期にありましたが、関西学院幼稚園が長年培ってきたキリスト教主義教育の理念と、伝統的な教育・保育の質が変わることなく継続されている点を高く評価します。各評価項目の取り組みを詳細に振り返り、全体をとおして適切に自己点検・評価が行われています。

1月に訪問した際には、季節感あふれる伝承遊びが充実しており、子どもたちが落ち着いた環境の中で遊び込む姿が見受けられました。教員が一人ひとりに寄り添い、丁寧に応答的な関わりをしてい

る姿に、関西学院幼稚園が大切にしてきた「一人ひとりが愛されていると感じられる保育」の実践を強く感じました。保護者アンケートの問2「幼稚園は、子どもたち一人ひとりを受け止めて保育をしている」、問13「お子様は、幼稚園で過ごすことを楽しいと感じている」の満足度が高いことは、その実践を裏付ける結果であり大変評価できます。

今年度より開始された給食において、徹底した衛生管理が行われている点を高く評価します。職員室前での献立掲示や実物展示は、その日のメニューや食材、分量を保護者が直接確認できる優れた取り組みです。また、各保育室前でのiPadを用いた写真や動画の配信など、日々の活動を積極的に可視化する取り組みが行われました。重点項目である「保護者との連携」において、こうした視覚的な情報共有に加えて、送迎時等の対面による丁寧なコミュニケーションが実践されたことは高く評価できます。子どもの育ちについての共通理解を深めるために、日々の対話をとおして保護者との信頼関係の構築が図られたことが確認できました。

一方で、保護者アンケートの問12「幼稚園は、子どもたちの健康管理、疾病予防に努めている（園医と連携の上）」、問16「私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している」の肯定的回答（強くそう思う）は、他項目と比較して低い結果となりました（問12：55.0%、問16：47.4%）。教員の自己評価においてはこれらの項目は高く、認識の差異が生じていることがうかがえます。今後は、教員が日々積み重ねている具体的な取り組みや、スクールモットーに込められた子どもへの願いがより丁寧に情報発信されることを期待します。

教員アンケートにおいては、問9「幼稚園は、教員の教育・研究の為の環境（学会・研修会への参加も含む）づくりに努めている」（肯定的回答43.8%）、問14「教員は幼稚園に勤めていることに誇りを持っている」（同68.8%）、問15「教員は向上心を持って幼稚園に勤めている」（同68.8%）の数値が経年的に見ても低い水準に留まっている点は、今後の課題として改善が望まれます。

幼保連携型認定こども園への移行に伴う大きな体制変化の中で、教員が子どもの健康と安全を最優先し、高い専門性をもって保育を実践したことが今年度の自己点検・評価から読み取れました。今後は、新たな特色となった「食」に関する項目をアンケートに加えるなど、幼稚園の具体的な取り組みが数値として可視化され、教員の質の高い保育実践が適切に評価される環境づくりが進展することを期待します。こうした試みが、教員の職務への誇りや自己効力感の向上、そして関西学院幼稚園のさらなる魅力発信につながることを期待します。

2025年度学校評価